

各種法然上人傳の比較研究

——特に序文を中心として——

藤 堂 恭 俊

本稿はもと、昭和二十四年十二月、知恩院古經堂において開催された法然上人傳研究會の席上で發表、そののち『佛教文化研究』第二卷（二十七年九月刊）の「法然上人傳研究會紀要(三)」にその概要を發表したのであるが、多少の明確ならざる點のあるに氣づいたので、ここに訂正詳論し、近年とみに上昇の一路を辿つてゐる法然傳の研究に寄與せんとするものである。

法然の傳記にして獨立したものに『源空聖人私日記』（私日記）以下十數種類あるなか、序文を持たないものは『私日記』・『法然上人傳記』（醍醐本）・殘闕『法然上人傳』（増上寺本）の三種に過ぎず、『本朝祖師傳記繪詞』（傳法繪・四卷傳）以下の多數の傳記が序文をもつてゐる。本稿はこれら『四卷傳』以下十種類の序文を系列的に整理することによつて、各傳記序文の相互の關係をあきらかにし、各種傳記の成立史的研究に示唆を與えんとするものである。

一

先ず第一類A群におさめ得るものとして『四卷傳』序、『法然聖人繪』（弘願本）序、及び『法然上人傳繪詞』（琳阿本）序の前半をあげることができる。即ち

四卷傳

蓋以、三世に多の佛出給、
若干の衆生をすくひましま
す。滅劫の千佛第四番、南
州中印土淨飯王の御宇、癸
丑歲七月十五日、后の夢に

(中略)

此故に末代の我等がために、
阿難を唱導として、佛教を
復せしむるに、面如淨滿月、
眼若青蓮華、佛法大海水、
流入阿難心云々生身の佛に
かはらず、三十二相を具し、
四辯八音あざやかにして辯
泉露を洩さず、懸河早漲。
これを梵王字を製して、一千
の羅漢筆をそめて、一點を不
落記し給へるを、正法千年は、

(中略)

然後四百八十餘年すぎて、
欽明天王御時、厩戸王子^{甲壬}
十月、百濟國の聖明王、釋
迦金銅像、經卷を奉送之刻、

各種法然上人傳の比較研究

弘願本

蓋以三世に多の佛出給て
若干の衆生をすくひましま
す。滅劫の千佛第四番南
州中印土淨飯王の御宇癸
丑歲七月十五日、后の御夢に

(中略)

この遊へに末代の我等のために、
阿難を唱導として佛教を
復せしむるに、面如淨滿月、
眼若青蓮華、佛法大海水、
流入阿難心^云生身の佛に
かはらず三十二相を具足し、
四辯八音あざやかにして、辯
泉露をもらさず、懸河早漲、
これを梵王字を製して、一千
の羅漢筆をそめて一點をも不
落記し給へるを、正法千年

(中略)

然後四百八十餘年すぎて、
欽明天王の御時厩戸王子^{甲壬}
十月、百濟國の聖明王釋
迦の金銅の像經卷を奉進之刻

琳阿本

蓋以三世におほく佛出給ひて、
若干衆生をすくひましま
す。賢劫の千佛第四に南
州中印度に淨飯王の御癸
丑七月十五日に、きさきの夢に

(中略)

此ゆへに末代の我等がために
阿難唱導して
復説せしむるに、

相好あらたに如來のごとし。

四辯八音鮮にして、辯

泉ながれみなぎり、

五百

の羅漢筆をそめて一點をおと
さず記し給へるを、正法千年

(中略)

それよりこのかた四百八十餘年を過て、
本朝の欽明天皇の御時むまやどの王子

四天王寺を建立す。それより以降、聖武天王東大寺を鑄造して佛法興隆、粗如來在世にことならずして、やゝひさしくなりにける。

いま先師上人念佛すゝめ給える由來を、畫圖にしるす事しかり。千時嘉禎三年西曆正月廿五日、沙門鉢空記之

四天王寺を建立す。それより以降聖武天王東大寺を鑄造して佛法興隆殆如來の在世にことならずしてやゝひさしくなりにける。いま先師聖人念佛すすめたまへる由來を畫圖にしるすことしかなり。

四天王寺を建立し給へり。そのち聖武天皇東大寺を建立し給て佛法興隆す。あたかも在世にことならずして良久しくなりにける。

この比較對照によつてあきらかなる如く、序文をもつ法然傳のなか一番早く—嘉禎三年(1232)成立した『四卷傳』の序文は、その作成年代及び傳記作者名をはずく以外、ほとんどそのまま『弘願本』に繼承され、ついで『琳阿本』もほぼこれを繼承しているが、ままた削除をこころみている點が見うけられる。

かくして法然滅後二十五年にして成立した繪詞形式をもつ『四卷傳』の他の傳記に與えた影響を知ることが出来る。これによると第一類A群は、釋尊の降誕・遺法の結集・佛教の和漢流傳と云う、佛教の發生とその傳播とに關する簡単な歴史的敘述をその内容とするものであり、法然を三國佛教史の上にとらえんとするものであることが知られる。

なお注意しておかねばならないことは、ここに比較對照した『琳阿本』の序文はその前半であつて、全文でないということである。しからば『琳阿本』の序文の後半は、いかなる資料にもとづいて作られ、且つ後世の傳記にいかなる影響をあたえているであろうか。これを第一類B群として、左に比較對照しよう。

伏以諸佛の世にいつる時をまち、機をはかる。時機これあひそむけば、感應もともあらはれがたし。

事をとぶらへば、西天雲くらし。釋迦圓寂の月とをくへだゝる。退て當時をかへりみれば、東漸露暖なり。彌陀邊方の花匂を發す。彼在世の正機に漏たるはこれ恨なれども、今滅後の遺法にあへる、又たれりとす。矧亦二尊の教門に入て一宗の正旨を得たり。佛恩肝に銘じて報じがたく、師孝源に還て謝しがたし。因茲いささか其譽を述て、彼徳をあらわさんとなり。

(以上序文)

一、又云蓋以諸佛利_レ世給、鑒_レ機施_レ益日月照_レ州給計_レ時廻_レ光、爰正法千年月氏佛法盛像法千年震旦佛法弘

加之摩騰後漢來時依_レ舍利神驗_レ創_レ建白馬寺_レ僧會々入_レ吳

國・剋以佛骨威光一造

建初寺云。本朝欽

明天皇御宇佛教始

渡、最初聖德太子

御手擧舍利一産既三

國佛法將來如此

如來滅後二千八十年人皇七

十五代、崇徳院の御宇に、

父美作國久米の押領使漆間

時國、母秦氏子なき事をう

れへて夫妻心をひとつにし

てつねに佛神に祈る。

妻の夢に剃刀をのむと見て

はらみぬ。夢みるところを

もつて夫にかたる

(中略)

長承二年癸丑四月七日午正

中におぼへずして誕生する

とき、二のはた天よりふる。

奇異の瑞相也。權化の再誕

なり。

爰如來滅後二千八十四年、人王七

十五代崇徳院の御宇に當て、

美作國久米南條稻岡庄に一人の押領

使號漆間時國

なきことを愁て、夫妻心をひとつに

して佛神にいのる。朱觀音云云

或時、妻秦氏夢に剃刀を吞とみて

懷妊す。みるところの夢を

夫にかたる

(中略)

長承二年癸丑四月七日午時

に、おぼえずして誕生す。

于レ時奇異の瑞相おほし。知ぬ權化の

再誕なりといふことを。

昔世尊の誕生には、珍妙の蓮、足を

受て七歩を行ぜしめ、今聖人の出胎

如來滅後二千八十二歳、日本人王七

十五代崇徳院長承二年癸丑

美作國久米押領使漆間朝臣

時國、妻は秦氏、

夫妻にも子なきことを

愁て佛神にいのる。ことに觀音に申

してはらめるなり。

みるものたなごころをあは
す。

四五歳より後、其心成人の
ごとし。同稚の黨に連磔せ
り、人皆之を歡嘆す。

又やゝもすればにしのかた
にむかふくせあり。親疎
みてあやしむ。

には、奇麗の幡、天に翻て二流くだ
りけり。

みる人掌をあはせ、きくもの耳をお
どろかさずといふことなし。

四五歳以後その性成人の
ごとし。同稚の黨に卓磔せ
り。

また動ば西の壁

にむかうくせあり、人

これをあやしむ。

いのりてまうけたる子はみなたゞ人
にあらず。勝尾の勝如、横河の源信
僧都みな母これを祈てまうけたる也。
この上人も觀音のあたへ給へる子な
るがゆへに、かくたうとき人なりけ
り。佛菩薩の衆生を利益し給事も、
時にしたがひ、機をはかるがゆへに、
釋迦如來出世し給て、乃ち正法千年
もすぎ、佛法またすきて末法ひさし
くなりぬれば、顯教もさとる人なく、
密教も行ずる人まれなり。これによ
りて上人さとりやすき念佛をひろめ
て、衆生を利益せんがために、この

いま法然上人と號する是也。
上人十三にして、叡山の雲
によぢのぼりて天台の金花
にはひをほどこし、二九に
して黒谷の流をくみて、佛
法の玉泉に心をすます。み
づから經藏に入つて一切經
をひらきみるこゝ五遍、

爰に智證大師將來の善導の
觀經の疏四卷を見給ふに、

男女貴賤、善人惡人きらは
ず平生臨終行住座臥をゑら
ばず、心を極樂にかけて口
に彌陀を唱もの、必往生す
といふ釋の心をみて、生年
四十三より一向專修に入、
自行化他ひとへに念佛をこ

爰聖人童形叡山雲
分、天台金花
眼開、僧體
黒谷流酌屢顯密
玉泉心澄
入經藏見_二諸經_一
五返、文句臨深理
得給事拔群。然
智證大師將來
觀經疏披、
一僧指授玄文見、
當今劫末衆生時處
諸緣不_レ嫌、一向專
念往生遂、
一切善惡
凡夫行住坐臥不論
專修稱名證_二無生_一云。
得此心。
自行化他勸進偏念

ととす。仍南都北嶺碩徳
みな上人の教訓にしたがひ、
花洛砂塞の緇素あまねく念
佛の一行に歸す。

この故に世こそりて智惠第
一の法然、得大勢至の化身
とぞ申ける

上人誕生のはじめより遷化
の後に至るまで繪をつくり
て九卷とす。

この比較對照によつて『琳阿本』の序文は、なに故かそのなかに當然本文として敘述すべき誕生・幼時の記事を持つてゐる。この點、この『琳阿本』の後半の部分を繼承したことの認められる『法然上人傳』（十卷傳）序の第二は、この誕生・幼時の部分を削除して、序文としての體裁をととのえてゐる。今『琳阿本』序の後半の書きだし部分を檢討してみるに、

琳阿本

如來滅後二千八十年人皇七十五代
崇徳院の御宇に、父美作國久米の押
領使漆間朝臣時國、母秦氏子なき事を

四卷傳

如來滅後二千八十二年、日本國人皇七十五代
崇徳院長承二年^丑美作國久米押
領使漆間朝臣時國一子生ずるところ

各種法然上人傳の比較研究

佛利益。南都北嶺碩
徳忽以^三聖人^一先達、
故花洛邊土老少悉念
佛一行歸、山林隱居
道者同稱名一法不^レ歸
云事無。
爰以智惠第
一法然、得大勢至化身
也。舌鳴音舉讚嘆
恭敬奉、依^レ之
誕生始遷化後
至傳作讚嘆奉者也。

右の對照によつて知られるように、『四卷傳』から繼承したものである。この『四卷傳』の文は第一圖誕生の繪の部分に示されている文である。なお法然の誕生・幼時等の記事をもつ『琳阿本』序の後半が他傳に與えた影響は、第一類B群の對照においてあきらかである。即ち、『拾遺古德傳』（古德傳）本文の誕生の記事は概ね『琳阿本』によつているが、獨自な文をなかにはさんでいる。さらに「年來のあひだ孝子なきことを愁て、夫妻心をひとつにして佛神にいのる。殊觀音云云」と、祈願の對象を觀世音菩薩にしぼつたのは、『弘願本』の本文、誕生の記事に「夫妻ともに子なきことを愁て佛神にいのる。ことに觀音に申してはらめるなり」という文によつたものと言ひ得よう。

さらに『十卷傳』の序（この傳記の序は三つの部分から成立つてゐる）第二の書きだしの一文は

十卷傳

蓋以諸佛利世給、

鑿機施益日月照州

給、計レ時廻レ光

四卷傳

諸佛の世を利し給、

機に隨て益をほどこし、日月の州を照す

時を測て光を廻す

北州に日かくやくたれば、南州にかけの

ちかづくより、須彌の峯、なく鷄の可見路と

鳴は、暗きやみ漸くはれて、みち見えぬべしと

轉也。佛教も又

正法千年は印土に盛にして、像法のはじめ

漢につたはりてのち、

爰以正法千年月氏佛法盛
像法千年震旦佛法弘

右の對照によつて知られるように、『四卷傳』の第一圖（誕生）につづく詞書にもとづいたもので、中間の文を削除したものである。このなか、『四卷傳』の「機に隨て……時を測て」とあるのを、『十卷傳』に「鑿機……計時」と書き改めているのは、『四卷傳』の本文を繼承している『琳阿本』の本文に「機を鑿て……時をはかりて」となし

ているのにもとづいたのであろう。

最後に『古徳傳』の序であるが、これを第一類B群におさめたのは、「伏以諸佛の世にいづる時をまち機をはかる。時機これあひそむけば感應もともあらはれがたし」という書きだしの内容が時機相應を言いあらわしている點、文章こそ相違するが『四卷傳』本文の「諸佛の世を利し給、機に隨て益をほどこし、日月州を照す時を測て光を廻す」に一脈通ずるものがあり、更に亦、序文に續く「爰如來滅後二千八十四年」以下の本文が『弘願本』や『琳阿本』特に後者に相通ずる文章をもっているからである。こうした二つの點に留意することによつて『古徳傳』を第一類B群におさめたのである。もし「しかし事をとぶらへば」以下「其譽を述て、彼徳をあらわさんと」と結ぶ一文に重點を置くならば、この序を、第一類B群におさめることは不可能である。何故なら獨自な構想をもつ序文であるからである。

これら第一類B群のなか、『四卷傳』序の全文を繼承した『琳阿本』序の前段は、後段に入ると、法然の誕生・幼時・登嶺・閲藏・善導の『觀經疏』披見と次第し、自行化他一向專修念佛・勢至の化身で結んでゐる。しかし後段において法然の誕生を敘述するに先立つて、「如來滅後二千八十年人皇七十五代崇徳院御宇」という『四卷傳』の第一圖の説明文をさしはさむことによつて、三國に互る佛教の傳播に關する敘述をもつ前段と、法然の生涯に關する敘述をもつ後段とを結びつけるに役立たしている。即ち法然を時間的な關係において佛教の開創者たる釋尊と結びつけるものであり、「如來滅後二千八十年」という時間的な經過を簡單ではあるが、前段に示すが如き歴史的・地域的に三國における佛教傳播という具體相において表現したのである。

又『古徳傳』の序は簡潔にして獨自な構想をもつもので、先ず時・機・教の三者の相應一致を述べ、釋迦・彌陀二尊の教である淨土一宗を開創せし法然に對する報恩のためその徳をさらわさんという製作意圖を記述するものであ

り、さらに『十卷傳』序第二は『琳阿本』序の前段の敘述内容に即して、より簡單に佛教の三國傳播を記し、ついで法然の誕生・幼時のころに全然觸れずに直ちに登嶺・閑藏・『觀經疏』・披見・自行化他一向專修念佛・勢至の化身で結んでゐる。この序には法然の誕生を『九卷傳』前序の如く「如來滅後二千八十年」の文をもつていないため、三國佛教の敘述と法然の登嶺以下の敘述とのつながりがなく、全體としてまとまつた感じが無いと言わなければならない。次に第一類C群におさめうるものとして『知恩傳』序と『十卷傳』序第三とを擧げることが出来る。この兩者はともに漢文體であり、多少の文字の改變・増加が見受けられる程度で、全く同文といつてよい。このなかには左の對照表に示されるように

知恩傳

抑尋釋尊與世者

淨飯王御宇癸丑歲

七月十五日始托摩

耶胎内、明年甲寅四

月八日出胎外、七步

經行。即唱天上天

下唯我獨尊三界皆

苦我當安之。是則

震旦當于周第四主

昭王廿二年、我朝

當于彥波瀲武鸕草

葺合尊八十三萬四

千三十六年一也。

四卷傳

南州中印土淨飯王御宇、癸丑歲

七月十五日、后の夢に金色天子、白象に

乘りて右脇に入給と見て、次年甲寅四、

月八日、佛出胎の時、寶蓮御足を承て

七步行給。偈曰、天上天

下唯我獨尊、三界皆

苦我當安之文是

振旦には周

昭王、日本には

彥波瀲鸕草

葺合尊八十三萬四

千三十六年甲寅相當。

『四卷傳』の序に基づいていることが知られる。ついで佛一代の所説は多岐なれども佛意の歸するところ淨土教にあることを敘述し、のちシナ・日本に佛敎の傳來することを述べている。即ちその敘述は

知恩傳

四卷傳

經_二十五年_一西天佛法傳_二震旦。

即後漢明帝

しな國は

漢明帝に摩騰迦葉、法蘭、優陀王宮に

現じ給し白氈の佛像を迎たてまつるに佛像大

光明をはなち給。永平七年_{甲中}也。

永平十年_{或云七年}丁卯_{或云甲申}歲也

勘_二合我朝時代_一當_二人王十一代帝

垂仁天王八十七年。

其後過_二四百八十六年_一我朝欽明天王

十三年壬申歲、如來教法傳_二來我朝。

然後四百八十餘年過ぎて欽明天王

御時、厭戶王子_{壬中}十月、百濟國の聖明王、

釋迦金銅像、經卷を奉_レ送（以上序文）

如來滅後二千八十二年、日本國

人皇七十五代崇徳院長承二年_{癸丑}

（以上第一圖中の記事）

計_二年記_一滅後二千八十一年也。

自_レ爾以來至_二于七十五代帝王

崇徳院御宇長承二年癸丑歲。

この對照表によつてあきらかであるように、『四卷傳』本文の敘述を繼承していることが知られるであらう。かくして『知恩傳』並びに『十卷傳』序第三はともに『琳阿本』の如き敘述形態に於て『四卷傳』序を繼承するものではないが、それとは違つた意味で、即ち部分的に『四卷傳』を繼承するものである點、第一類C群におさめるところとした。

さらに第二類A群におさめうる『四十八卷傳』序の敘述にあい通ずる點が見受けられる。即ち

智 恩 傳

四十八卷傳

凡唐朝善導和尚爲彌陀化身、

立淨土一宗、專勸他力往生。即

楷定古今、改百餘家執見、

分別專雜二修、顯本願稱名正行、

これにつきて、諸家の解釋蘭菊

美をほしきまゝにすといへども、

唐朝の善導和尚、彌陀の化身として

ひとり本願の深意をあらはし

このように第一類C群において、第二類A群におさめうる『四十八卷傳』序の記述と關聯するところあることは注目すべきことである。

このC群の敘述内容は、聖道自力と淨土他力の對比、法然出世の意義・釋尊の出興と佛意の本懷、佛教の和漢流傳、善導の古今楷定、法然の出生とその教化の實態を述べている。しかして法然を凡夫救濟の淨土門の開創者として、釋迦・善導の兩聖と直結せしめ、彌陀の本懷の弘傳者たることを強調している。従つてかかる敘述内容によつて系列を分けるならば、比較對照し得ないものをおさめる第三類に編入すべきであらう。

二

次に第二類A群におさめ得るものとして『法然上人傳記』（九卷傳）前序、『法然上人行狀繪圖』（四十八卷傳）や『十卷傳』序、第一を擧げることが出来る。このなか『九卷傳』前序と云うのは、「老の眠たちにおどろきやすく」という序文に始る『九卷傳』に先立つて、『法然上人繪詞』卷第一の内題に續いて「夫以、我本師釋迦如來は」の序文から上人幼時・夜討・父時國の死・叔父觀覺の寺に入室・母子訣別・つくり路で法性寺殿とめぐりあう迄の記述をもつ、殘闕的なものに附せられる序文を指すので、その製作年代は「上人の遷化すでに一百年に及べり」といつているようにその成立年代のあきらかなものである。しかしこの前序と『法然上人記』との關係はよくわからない。その

ことはともかくこの三者を比較すると次のようである。

九卷傳前序

夫以、我本師釋迦如來はあまねく
流轉三界の迷徒をすくはんがため
に、ふかく平等一子の悲願をおこ
しますすによりて、たちまちに
無勝莊嚴の土をすてて、忝娑婆濁
世の國に出て給しよりこのかた、
非生に生を現じ給ふゆへに、

(中略)

但し八萬の教法まち／＼なりとい
へども、大小の機根しなじななり
といへども、みなこれ穢土にして
自力をばげまし濁世にありて得道
を期す。たゞこれ
聖道難行の教にしていまだ淨土易
往にあづからず。

各種法然上人傳の比較研究

十卷傳序第一

夫以我大師釋迦如來普
爲レ救ニ流浪三界迷徒
深發平等一子悲願
捨ニ無勝莊嚴土ニ忝
出ニ娑婆濁世國ニ給
以來非生現レ生給故

但八萬教法區

大小根機雖ニ種々也
皆是穢土

勵ニ自力ニ有ニ濁世二期ニ
得道ニ。只是

聖道難行教未ニ淨土易
行道。

四十八卷傳

夫以我本師釋迦如來は、あまねく
流浪三界の迷徒をすくはむがため
に、ふかく平等一子の悲願をおこ
しますすによりて、忽に
無勝莊嚴の化をかくして、かたじ
けなく娑婆濁惡の國に入給しより
このかた非生に生を現じて

(中略)

教門しなことに、利益

これまち／＼なり。

そのなかに、聖道の一門は穢土
にして自力をばげまし、濁世に
ありて得道を期す。但おそらく
は、とき澆季にをよびて二空の
月くもりやすく、こゝろ塵縁に
はせて三惡のほのをまぬかれが
たし。煩惱具足の凡夫、順次に
輪廻のさとを出ぬべきは、たゞ
これ淨土の一門のみなり。これ
につきて、諸家の解釋蘭菊美を

には善導和尚彌陀の化身として本願の名號をひろめ、我朝には法然上人、勢至の來現として他力の往生をすゝめ給へり。

然者則濁世の導師として但信稱名の行をさづけ、如來の使者として出離解脱の教をのぶ。時機相應して順次の往生をとげ、感應道交して揭焉の引接にあづかるともがら道俗貴賤をえらばず、男女老少をいはず、平生の濟度といひ、夢の後の巨益といひ、目に見へ耳に滿たり。聞ても信を生ぜず。あひながら行ぜざらん者は、ひとへに宿業の拙き事をはづべし。何ぞ古賢の事にあづからんや。然に今上人の遷化すでに一百年に及べり。星霜をのづからあひへだたる。

(中略)

おろかなる者のさとりやすからむため、見聞んものゝ信をすすめん

善導和尚阿彌化身
弘本願稱名我朝法然
聖人勢至來現勸
化往生一給。

然則濁世導師授_二但信稱名行_一、如來使者
出離解脱教述。時機相應
得往生者、

不_レ擇_二道俗貴賤_一、不_レ云_二男女老少_一、平生濟度云夢
後利益云、恩徳誠難謝者也。

ほしきまゝにすといへども、唐朝の善導和尚、彌陀の化身として、ひとり本願の深意をあらはし、我朝の法然上人、勢至の應現として、もはら稱名の要行をひろめ給ふ。

和漢國ことなれども化導一致して、男女貴賤信心を得やすく、紫雲異香往生の瑞すこぶるしげし、念佛の弘通こゝに尤さかむなりとす。

しかるに上人
遷化のゝち、星霜やゝつもれり。

(中略)

をろかなる人のさとりやすく、見むものゝ信をすゝめむ

ために、數軸の畫圖にあらはし萬代の明鑒にそなふ。念佛の行者として誰人か信受せざらむ。

依レ今於ニ此道場、大師聖靈
濟生利物新影曼陀開ニ展
讚嘆梵筵。仰願上人垂ニ哀
愍納受ニ給。乃至法界平等
利益敬白。

ために、數軸の畫圖にあらはして、萬代の明鑒にそなふ。往生をこひねがはむ輩、たれかこのころをよみせざんむ。

この對照表によつてあきらかであるように『九卷傳』前序は、『十卷傳』序の第一及び『四十八卷傳』序の原始形態と言ふことが出来る。即ち『十卷傳』序第一は『九卷傳』序の後部五分の二を削除しているが、文體を改めて漢文體としているのに對し、『四十八卷傳』の序は文章の改變・削除・追加が目立つている。

この第二類A群のなか『九卷傳』の前序は、釋尊の出興の意義、入滅、遺法——聖道門、及び淨土門を弘傳せし人々、時機相應、不信の徒の豫想、傳記製作の動機と過程並びにその目的を記し、これに基づく『十卷傳』序第一は不信の徒の豫想以下の記述を省略している。また『四十八卷傳』序は『九卷傳』のそれと殆どその内容を同じくしているが、淨土門の特長を記述する點が異つている。この第二類A群の序を通して言ひうることは、その製作の動機が護教的であり、その意圖が布教的方面に向けられていることにじみ出ていることである。

なお『法然上人傳記』（九卷傳）の後序は、先ずその製作の動機・方法・目的を敘述し、ついで釋尊の出興・佛教の漢土流傳・漢家淨土教諸家の異說・善導の定判・善導の遺文の本邦・將來・叡山の淨土教・法然の決判と次第し、傳記製作の過程をもつて結んでいる。従つてこの序文は全體の構想としては、他のどの傳記とも異つて比較對照し得

ないが、左に示す如くある部分において第二類 A 群と關係ある點で、これを第二類 B 群となしうるであらう。

九卷傳前序

正法一千餘廻をおくりて、漢の明帝の代にはじめて東漸す。

四十八卷傳

序四卷傳序

正法千年は、五天竺にさかりにして、しな國は、漢明帝に、摩騰迦葉、法蘭優陀王宮に現じ給し白鬚の佛像を迎たてまつる……

代々の三藏、宗々の諸祖、淨土をたて、衆生をすゝむるに、おほくは地前地上の聖人をその機とす。

花嚴に元曉といふ人正爲凡夫

傍爲聖人の談をなせども、いまだひとへに罪惡の凡夫のためには釋せず。ただ我が高祖光明寺の

善導大師のみましくて、證明

如來說法、十六觀法、但爲常没衆生、不于大小聖也と定判した

まへり。さればこの經王の義趣をのぶる。諸家六十有餘におよべりといへども、今家の妙解、神僧の指授せしにはしかず

諸家の解釋蘭菊美をほしきまゝにすといへども

唐の善導和尚、彌陀の化身として、ひとり本願の深意をあらはし

この對照表によつて知られるように、『九卷傳』後序のある部分は『四十八卷傳』の相當部分を詳述したような記事をもつている。このことは『九卷傳』の作者があえて詳述を試みたのか、又逆に『四十八卷傳』の作者が省略を試

みたのか判決を下すことが出来ない。又善導の遺文の本邦將來について『四十八卷傳』序は何等觸れるところがないが、『九卷傳』後序はこれを示して次の如く記している。即ち

九卷傳後序

琳 阿 本

つたへ聞彼遺文は、仁明、文徳の御代に

あたりて、慈覺智證兩大師の將來として

興隆さかむなりき。

爰に知證大師將來の

善導の觀經の疏四卷

と記し、ついで詳しく叡山の淨土教——常行三昧堂・誦經念佛の曲韻・惠心の『往生要集』についてのべている。このことは『九卷傳』の後序の成立事情が『四十八卷傳』の成立時における淨土教團の客觀狀勢乃至傳記作者の叡山佛敎に對する態度と異なることをあらわすものであらう。このような點は法然を、「印土には釋迦出世の本懷たり、漢家には善導大師の證誠たり、我朝には惠心の先徳の開板たり、源空上人の決擇」という如き、四聖の一環として把握しようとする態度にもあきらかであり、「唐朝の善導和尚、彌陀の化身として、ひとり本願の深意をあらはし、我朝の法然上人、勢至の應現として、もはら稱名の要行をひろめ給ふ。和漢國ことなれども化導一致」と導空二祖の直結のべんとする『四十八卷傳』の文との間にへだたりを認めることが出来る。

ともかく『九卷傳』の後序は第二類A群に屬する『四十八卷傳』と關聯をもつ——先の對照表によつて知られるように第一類の『四卷傳』や『琳阿本』とも關聯をもつのであるが、それらの斷篇的であるのに對し重要事項に關する記述の濃度の差違を示すものとして、この『九卷傳』後序を第二類B群としておくことが妥當であらう。

なお、『黒谷源空上人傳』（十六門記）序は他傳のいずれとも比較對照し得ない獨自な敘述内容をもつものとして第三類として置こう。即ちその内容は、先ず人間觀を示し、釋尊の遺法に聖淨二門あることを述べ、淨土の一門に遭

える悦びを記し、最後に製作の動機をのべて「報恩謝徳」としている。結局この傳記の序文は「先師源空上人の慈訓の化益」に關する内容を教學的に闡明せんとするものに外ならない。

三

數多い法然傳のなか、その成立の年代のあきらかなものは數少い。繪詞形式による『四卷傳』は序文をもつ法然傳のなか最も古く、嘉禎三年(1237)とされ、これに續くものが『知恩傳』である。即ち同傳下卷の奥書によると「先師上人入滅之後僅雖_レ歷_三七十餘廻星霜_一、當世奉_レ值_三上人_一之輩已_レ以_レ希也」と記しているように、法然滅後七十餘年(1287)前後の成立である。さらに『古徳傳』は『存覺一期記』などによると、茨城縣の鹿島門徒の要請にこたえて正完三年(1301)、三十二歳の覺如がわずか十七日という驚くべき短期間に九卷の傳記を編纂したことが知られる。次に『九卷傳』の前序によると「今上人の遷化すでに一百年に及べり」とあるから1312頃の成立と考えられ、『四十八卷傳』は『御傳緣起』によると徳治二年以降十年にして大成をみるに至つたと記しているから1316頃の成立とみることが出来る。なお『十六門記』は「安貞元年丁亥極月上旬」とその成立年代をあきらかにしているが、疑問の點があるので信用することが出来ない。

そこで一二三七年に成立した『四卷傳』の序は第一類A・B兩群に影響を與えているが、その敘述内容は歴史的記事に始終しているのに對し、一三二二年頃に成立をみた『九卷傳』の前序は『四十八卷傳』序に影響を與え、その敘述内容は思想的と言わなければならない。かかる傾向に對して一二八七年頃成立した『知恩傳』の序は、歴史的敘述を主としながら思想的内容をその中に織込んでいることに注目される。このことは法然傳序文の展開の跡を示すものと言わなければならない。